

2021 年度シニア会総会議事録および交流会録

2022/02/28 14:00- 16:30

オンライン会議

参加者

杉山、遠藤、城戸、疋田、岸浪、小林、長尾、後藤、佐藤巖、三浦、石坂、近久、機械学会支部（宮崎） 13名
（敬称略、順不同、以下同様）

第1部 総会

コロナ禍のもと、1年振りに総会がオンライン（Zoomを使用）で開催された。

議題1： 2021 年度活動報告

杉山委員長（会長）から資料1に基づき、2021 年度シニア会運営委員構成と各地区（道央、道南、道東地区）における活動報告が行なわれ、了承された。

議題2： 2021 年度会計報告

小林副委員長（副会長）から資料2に基づいて2021 年度の会計報告があり、コロナ禍のため基礎技術セミナー関連の支出のみであったとの説明があり了承された。なお、新型コロナウイルスによるオンライン会議形式が増えたために、多くの残高が発生した。この残額は全額、支部に返還されることが説明された。

議題3： 2022 年度活動計画（案）

杉山委員長から、資料3に基づき、2022 年度の活動計画（案）は、新型コロナウイルスの感染状況等を考慮し、今後実施計画を作成することが説明され、了承された。

なお、従前実施してきた「ものづくり技術セミナー」は、後援で実施する予定であることが

報告された。

議題4：2022 年度会計予算（案）

小林副委員長から資料4に基づき次年度の会計予算案に関して、コロナ禍との関係もあるが運営委員会開催について対面とオンライン併用のための予算を計上したとの説明があり了承された。

議題5： シニア会運営委員の増員について

シニア会の諸活動を活発化させるため、シニア会運営委員会で検討・議論した結果、各地区（道央、道南、道東地区）で、60 歳前後の運営委員を1～2 名増員することにした。

各地区で検討した結果、2022年4月から、道南地区で運営委員を1名増員することを了承した（具体的には、室蘭工業大学河合秀樹教授）。

4月から入会される3名の説明があった。併せて、会員増強に関して意見交換を行った。

第2部 交流会

参加者の近況報告（以下敬称略）

杉山：北京オリンピックが終わったら、ロシア軍がウクライナに侵攻した。このニュースを、連日TVでよく見ている。

運動不足を解消するため、週に2～3回、30分～1時間程度のウォーキングを行っている。

遠藤：佐賀大から研究費をもらい、洋上の小規模風力発電の開発研究をしている。

城戸：北海道科学大学短期大学部が今年度末で閉鎖。14名中1名が大学内で転籍。その他は外部転出。自身は4月から東北学院大学に移動。

近久：北海道能開大入学希望者を増やすための学内変革について、簡単に説明。

疋田：特に活動はしていない。運転免許証の更新において後期高齢者になった。絵画等の趣味を再開したい。

後藤：昨年3月に室蘭テクノセンターを退職した。

岸浪：後期高齢者運転免許試験は問題なくパス。シニア会の話は楽しみにしている。数年前の活性化を取り戻してほしい。新入会員3名を歓迎する。着床式風力発電の重要性について自説を紹介。

小林：カーリングやウクライナ等に関して毎日テレビを見ている。北見は新型コロナウイルスの発生が少ないが、多発地域を心配。道内大雪に関しても、北見は比較的少ないので助かっている。前回の交流会で話題提供した内容を論文にまとめ査読中。

石坂：室蘭工大の学外協力員。コロナに起因してこのところ室工大との交流が多少疎遠になっている。

長尾：元工業試験場、現在機械工業会（12年目）。機械工業会で技術支援・産業支援を行っている。北海道における航空機関連部品産業はこれまでゼロだったが、新しいきっかけができそう。最近はロケット関係についての参入を図っている。北海道のものづくり産業での人手不足は深刻であり、Uターン・Iターンについても努力中。

三浦：溶接検定副委員長を退任。省エネルギーセンターのアドバイザーも退任。現在は安全コンサルタントおよび技術士会を担当。再エネ利用による水素エネルギーに関して見直しした。原子力を利用した高温ガス炉に期待。減速剤に黒鉛を利用、冷却材にヘリウムガスを利用し、950度まで利用可能。安全性が高いと資料では説明されている。シニア会で話題にしてほしい。

佐藤： これまで JR 北海道で設計業務を担当。JR 苗穂工場長を経て、監査役。現在、札幌交通機械に勤務。ニセコ駅前にニセコ鉄道遺産群を計画中。クラウドファンディングで輸送費を調達しニセコエクスプレス（設計を担当）、蒸気機関車 9643 を展示中。関連の図面等も寄付されている。

質疑：小林先生から質問

Q:デュアルモードビークルは北海道で中止になったが、最近報道された四国安佐海岸鉄道で動いているビークルとはどこが違うのか？

A：同社は JR 北海道が H14 年から H27 まで開発（設計を担当）していたが、トンネル事故後経費削減のため開発を中止。徳島県から引き取りオファーがあり、昨年からは 3 両で営業している。特許なども渡している。マイクロバスベースで軽いため雪があると脱線もあり、道内での普及は難しい。

以上にて、交流会は終了した。

〔議事録作成：シニア会執行部（長尾・近久ほか）〕